

大前神社本『平家物語』の「殿上闇討」について

山下 正 治

一

流布本『平家物語』の「殿上闇討」は巻第一の「祇園精舎」のあとにつづいており、「殿上の仙籍を許されなかつた」平家から、忠盛が殿上人となつていった様子を描いている。その大筋は次のようなものである。

- (1) 鳥羽上皇のころ、忠盛が院の御願得長寿院を造進して、内の昇殿を許された。供養は天承元年三月十三日であつた。
- (2) これを憎んだ殿上人が同じ年の十一月二十三日の五節の夜、忠盛を闇討にしようと相談した。
- (3) これを知つた忠盛は、自ら帯刀して宮中に行き、武装の下来を中庭に控えさせた。
- (4) これを恐れた殿上人は闇討を中止にした。
- (5) おさまらない殿上人は宴会で忠盛を「伊勢へいじはすがめ」と恥かした。
- (6) 五節が終り、殿上人が鳥羽上皇に忠盛の違反行為二つを訴え、殿上人の資格を剝奪するよう求めた。
- (7) 鳥羽上皇が裁き、忠盛に否がないと決定された。

物語は新旧である貴族と武士の交代、武士時代の曙を痛快に描き、その後は天皇家の協力を得て平家が天下人として出世していくきっかけを描いている。その描きかたはきわめてよくできており、あざやかでもある。

この物語は、流布本など語り本系といわれるものの多くには、このようになっていたが、読み本系といわれるものには、先ほどの流布本の大筋の(1)と(2)の間に、得長寿院の供養の様子が詳しく描かれている。その様子を大前神社本も載せているのであるが、この得長寿院の供養の記事はもともと『平家奥秘抄』の「堂供養」であって、『平家正節』に入っていないと語られることがなかった。以下、富倉徳次郎氏によると、次のようである。⁽¹⁾

「堂供養」は諸伝本中、『妙覚寺本』『両足院本』『如白本』『南部本』『康豊本』『米沢図書館蔵八坂本』『長門本』『延慶本』『源平盛衰記』には含まれている。巻一「祇園精舎」の次に位置すべきもの。

しかし、この章段は、本来単独に創作せられたもので、その主題となった寺院が、『平家物語』に出る得長寿院であったために、『平家物語』の中に採り入れたと考えられる。それが平曲として語られたという記録は『看聞御記』の永亨四年(一四三二)十月二十八日、永亨八年(一四三六)閏五月一日に域竹検校が語った由見えるものである。(中略)

この『平家物語』の説話は、その話(東大寺大仏開眼供養の説話)を得長寿院説話に対比しているのであるが、日吉坂本の地守権見の大床の下に住む貧僧が、実は薬師如来の化身で、見事な導師ぶりを示したという話は、中世好みの仏教説話として、喜び迎えられたと考えられるのである。したがって、そこには忠盛の名も見えず、この説話そのものは平家興亡史とは無関係の全くの傍系説話であり、本来は『平家物語』にはなかったと判定するのが当然ではあるが、平曲としてが秘事として語られたと考えられるのである。(中略)

なおこの説話は、『延慶本』『長門本』『盛衰記』において、相当内容に流動があるが、『延慶本』が古く、語りも

の系はそれと近いと判定してよいであろう。『長門本』は、『延慶本』に近い。

と、早くから指摘しておられる。この説話に初めて論究されたのは渥美かをる氏で、その意義は大きかった。⁽²⁾その後「堂供養」の考察が出されて⁽³⁾おり、これらを参考にしながら、大前神社本の記事との違いを見ていこう。

まず、大前神社本の本文を紹介しよう。

二

而るに、刑部卿忠盛未だ備前の守たりし時、鳥羽の院の御願得長寿院を造進して、三十三間の御堂を造り一千一体の御仏を居へ、供養は天承元年三月十三日なり。凡そ佛像粧嚴の有様、極楽浄土の儀式も角やと覚えて、心も詞も及ばれず。御供養の導師には天台座主忠尋大僧正をぞ定められたりしかども、堅く辞し申させ給ひけり。懸りしかば、所々の名僧・寺々の高僧達、我も我もと望み申されけり。中にも浄土寺の僧正実因、同じき寺の覚忠大僧正、園城寺には権大僧都良円、宇治の僧正観真、箕尾法眼蓮真、桜井の宮の上人円妙を始め奉って都合十二人とぞ聞こへし。此の人々と申し奉るは、或いは主上の御外戚、或いは法皇の御持僧にて、各々公請を勤められ、何れも顕密兼学して表白金玉を連ねて説法富留那の跡を継ぐ。我も我もと望み申させ給ふも理り也。上皇、何れも避け難く思しめし、所詮、鬪の計に任せらるべきとて、十二人の高僧達を請じ集めて、定を又冥の照覧も有らんとて鬪を一つ副給ふ。十三の孔子を捻て仏前に差し置かる。彼の高僧達の、印を結び呪を誦し、面々に願を立て誓を致し、之を取らしめ給へるに、去れども皆な十二の白紙をのみ取りて導師の御孔子は残りけるこそ不思議なれ。彼の高僧達、力に及ばず各々宿坊へ帰られける。上皇も不思議の事に思しめし、所詮、智恵深く志有らんとする貧僧を以て導師に

請ぜばやと思しめし、未だ仰せ出されざる、さりしに何くより来たれるとも無く、色黒く、疲せ衰へたる老僧、僧伽梨衣を肩に掛け、院の御所に参りて申しけるは、「実とや君は、貧僧を以て導師に請ぜらるべしの由、承り及び候ふ。其の貧僧にて候えばとて望み申されたりければ、上皇、御心の内に思しめし、外にはいまだ仰せも出だされざりつるに、加様に望み申されたりければ、如何様、他心通を得給へる僧にこそとて、御供養の日を御約束有つて歸されける。

去る程に天承元年三月十三日、道場の粧嚴を構へ、供養の儀式を調へて、行幸も成り、女院宮々以下、摂政関白大政大臣以下公卿皆、得長寿院へ参らせ給ふ。馬車避け敢へず。君を始め奉つて百寮、掌を合はせ、貴賤首を低て、相待つ処に彼の僧、又何くより来たれるともなく十善の傍に着座し給ふ。初め院の御所へ参られけるには引き替えて法衣を着し、二人の従僧、十二人の下僧有つて随ひ奉る有様、昔、靈山説法の砌りも是れには過ぎじとぞ見へし。去る程に、導師、礼盤に差し寄り三礼し了て後、啓白の金鳴らし、凡そ一代の聖教を吐きて、五時の仏法を尽くし顕密滞らず富留那の弁ぞ続給へり。されば阿難の再誕、釈尊二度世に出させ給ふかとも覺えたり。更に凡夫の讃える所に非ず、実とに三十三間の御堂も動き一千一体の尊容も納受を乗させ給ふとぞ見えし。上林紅葉の色、金谷の花の匂ひ、中殿の燈、玉池のはなふさ、呉山千董を譲り、海岸六銖、香匂を施す。一とめ叡慮に叶はずと云ふ事なし。幡蓋天に翻へり、綺羅、地を照らす、舞台にかざす花の樹は妓女の袂に董し、歌堂飭る梅の匂ひは妃口に簫笛を吹きて、讚法の樂を奏す。陶匏品々、異なりといえども、春鶯秋風士也。耳を驚かし、覆物の幸同じかざれども白花紅葉の色眼を養ふ、希代の舞樂供養也。

去る程に、其の日の法会終つて後、下座の砌りに種々の被物を調へ、加布施の数を知らず。十二人の下僧、此れを請け取つて門外に出て乞食非人等に配分し与えつつ、一紙半錢も持て歸らず。さて、導師従僧共々歸られければ、

是れ、帝只に非らずとて勅使を付けて見せらるるに虚空に翔えり、叡山に向かい根本中堂の内へ入り給へとぞ見へし。是れ則ち中堂の薬師にて御座すにや。二人の従僧は日光月光の二菩薩、十二人の下僧は十二神将是れなり。

昔、聖武天皇の御願東大寺の供養遂げられける御導師には行基菩薩を以て請ぜられたりしかども、流石さすが、日本無双の大仏寺、小国の比丘を以て導師に請ぜられる事、然るべからざると辞し申し給ひつ。昔、靈山浄土にて同聞の衆婆羅門と云ふ尊者とて、今天竺に有り、我れ勅使として請じ奉つらんと宝瓶に花を飴て闍伽の折敷にすえ、天王寺、難波津に浮かべたりければ、浪風揺らして西を指して行くとぞ見へし。七日を経て婆羅門尊者、闍伽の折敷に乗らしつつ難波津に来給へり。其の時、行基菩薩対面して、

靈山の釈迦の御前に仕へてし真如朽せず相見ゆるかな

迦毘羅会の苔の筵に契りてし文殊の御顔今ぞ拝せる

去る程に、東大寺大仏の御供養、事故なく遂げられて後、婆羅門僧正に成られ別当にて御座すべき由、仰せられ下されけれども、固く辞し申させ給ひ帰天し給ひぬ。その後、行基菩薩は御年八十と申す天平勝宝元年二月廿日、終に入滅し給ひぬ。

さても彼の歌共の意を以つて案ずるに、婆羅門は普賢、行基菩薩は文殊なり。東大寺大仏の御供養の導師をば、普賢文殊二菩薩遂げさせ給ひけるに、それは上代の事なればさも有りけん。末代澆季と云ひながら、鳥羽の院如何なる御願が有りてか現に照覽し給ふらん。忠盛又、如何なる信力を以つて造進せられけるにや、忽ちに影向供養し

給ふらん、不思議なりし事共なり

これが大前神社本の記事である。これを『平家奥秘抄』の「堂供養」、あるいは延慶本、長門本、源平盛衰記⁽⁴⁾のいわゆる読み本系といわれるものと、どのように異っているのかを次にみていくことにしよう。

三

まず、供養の日であるが、大前神社本はすんなりと「天承元年三月十三日なり」とあり、「堂供養」や延慶本も同じように載せているが、長門本と源平盛衰記によれば、なかなか終らなかったようである。

天承元年辛亥十一月十六日、公卿六人、職事、弁官惣じて六十四人、清暑堂の大床にして供養の日時を評定ありて、同廿一日午の時と定めらる、すでに可_レ被_レ遂にて有けるに、其時刻に及びて、大雨電雨夥しかりければ、其日は延引す。同廿五日に官の庁にて猶せんぎ有、廿九日天老日なりければ、遂らるべきにて有けるに、氷の雨夥しく降下る。然る間、牛馬車人打そんぜられて出行に及ばず、仍て其日も延引せり、禅定法皇なげき思召れて、供養三ヶ月延引の後重ねて僉議あり、同じき次の年三月十三日、曜宿相応の良辰なりとて、其日供養と定められぬ（長門本）

雷雨によって三度も延期になって、ようやくとりおこなわれたのであった。この供養の日について「堂供養」や流布本では「天承元年辛亥三月十三日」と記すのであるが、長門本の記事によれば「天承二年」ということになる。これについて『平家物語略解』には、

供養は天承元年云々　天承元年は長門本並びに盛衰記に「天承二年」に作る。中右記、長承元年三月十三日の条に、「今日千体観音堂供養可被_レ行也」とあり。朝野群載、歴代皇紀、百練抄等皆供養の時を長承元年三月十三日となす。長承元年は天承二年の追記なり。(中略)(天承は)二年八月十一日長承と改む。されば天承元年は誤にして、長門本盛衰記等の記述を是となすべし。と注記している。

次に導師のことであるが、大前神社本は天台座主忠尋に決めたが辞退したので名僧高僧が希望し、六名をあげ「都合十二人」が名のりをあげたと記している。導師のことは衆人の注目であったようであるが、延慶本と「堂供養」には次のようにある。

御導師には天台座主と御定めあり。然るに、座主堅辞し申させ給ふ間、「然らば誰にかあるべき」と仰せあり。其の時所所の名僧、寺寺の別当、望み申さるる所十三人なり。浄土寺の僧正実胤・同じく别当道忠僧都・興福寺大進法眼実信・同じき寺の大納言の法印成運・御室の御弟子祐範上人・園城寺権大僧都良円・同じく智覚僧正・東大寺の大納言の法印隆鑣・花山の僧正覚雲・箕尾の法眼蓮浄・兵部卿の僧都祐全・宇治の僧正寛深・桜井の宮の聖人円妙、以上十三人なり。此の智徳達は皆法皇の御外戚、或は御師徳、或は御祈禱所の満徳なり。皆以て公請を以て勤めらるる人人なり。誠に種姓高貴にして、智恵明了なり。浄行持律にして、説法は富楼那の跡を伝へ、我れこそ天下第一の名僧よ、我れこそ日本無双の唱導よと、各橋慢をたて望み申させ給ふも理なり。「実にも天台座主の外は、此の人人こそ器量よ」と法皇も御誼あり。さあれば思し召しわづらひてぞ渡らせ給ひける。導師の天台座主の名前が「堂供養」と延慶本にはないが、長門本、源平盛衰記には「忠尋」とある。座主の導師辞

退により、代って希望した十三人を長門本は次のように挙げており、「堂供養」と延慶本とほぼ同じである。

浄土寺の僧正実印、同別当覚恵僧都、興福寺の大進法橋実信、同寺大納言法印経雲、御室の御弟子祐範上人、園城寺の権大僧都良円、同寺智覚僧都、東大寺大納言法印隆範、花山院僧正覚雲、葦尾法眼蓮生、徳大寺兵部卿僧都祐全、宇治僧正観信、桜井宮上人円妙

大前神社本の六名は「堂供養」、延慶本、長門本の十三人に含まれていると思われるが、他をどのような理由で省いてしまったのであろうか。

この際の最初の指名の天台座主（忠尋）は、平家と延暦寺の関係からであろう。当然であったのか、何ら僉議の余地なく決定したように、「堂供養」をはじめ、いずれも記している。これは長門本のみの記事であるが、天台座主が辞退したあとに、

さらばとて興福寺の別当僧正を召れけるに、是も再三辞し申されて参り給はず

と記している。『平家物語』前半には天皇家、平家、藤原氏が園城寺、延暦寺、興福寺と結びつき、勢力争いを演じている様子が随所にみられるが、「堂供養」の記事からもうかがえるようである。

導師決定にくじ引きを用いたことについては、源平盛衰記以外いずれも記していることである。この際、大前神社本のように志願した僧が十二人であると記す本はくじの数も十三であり、一つが白くじである。この間のことを長門本は、

毎日公卿僉議有けれ共未定らず。されば法皇いかがすべき、一人を導師に用ひば、残る十二人の恨を遺すべし、朕は人の恨を息んところ思召に、御堂供養の時、十二人愁をおはん事こそ浅ましけれと仰下され、

と、鳥羽法皇の心配りを記している。くじ引きの発案は公卿であったが、これについても、公卿の人数分のくじ案に

対して法皇が、

朕が現当二世の大事、只此事にあり、白紙と導師と十三の鬮を取らずならば、一定独りは取当らんずらん、但し十三ながら仏意に叶はぬ僧にてもや有らん、さらば若し誠に導師たるべき人、此の十三人の外にや猶ましますらん、冥の照覧も知りがたし。されば今一つの鬮をくはへて十四になすべし。十三の白紙と一つの鬮と、都合十四の鬮を取らずべしと仰下されき

と言われたという。十三人の志願者があった時には「実にも、天台座主の外は、此人々こそ器量よと、法皇も御誂有り」と喜ばれた法皇がこの逡巡であるが、これは長門本の法皇に寄せる気持のあらわれであろうか。

結果は全員落選で、当選くじひとつが残り、この日は決定されなかった。法皇は「冥の照覧、誠に様有るべし」とおっしゃり「此の僧共は仏意に叶はざりけり」と思われたという。

そこで条件を下げて候補者をさがすことになるが、法皇の願いは「只願はくは、必ずしも智者にあらず、能説にあらずとも、心に慈悲あり、身に行徳いつくしく、天下第一の貧窮ならん僧を導師に用ひばやと思し召すはいかに」(堂供養、長門本、延慶本) というものであったが、「公卿未だ御返事申されざる所に」(同)、ひとりの貧僧が現われた。この時のことを

長門本 或時法皇、得長寿院に御幸なりたり、八十有余計なる老僧の

堂供養、延慶本 (くじ引きが終り、法皇も公卿も院の御所におられるときに)

大前神社本 (得長寿院を) 未だ御出されざる、さりしに

とあって、長門本が決定に時間がかかっていることを示している。貧僧の導師志願について、公卿が猛反対し、追い出そうとすることが長門本、「堂供養」にあるが、法皇の許可によって決定したことが認められる。ここは大前神社

本が長門本などより納得のいくように記している。

上皇、御心の内に思しめし、外にはいまだ仰せも出だされざりつるに、加様を望み申されたりければ、如何様、他心通を得給へる僧にこそとて

と、決定の理由が他心通の持ち主であったことを挙げている。法皇が貧僧に身元を尋ねると「当時は坂本の地主権現の大床の下に時時庭草むしりて候」と応えたと長門本などにはみえ、さらに坂本まで尾行させて確認し安心している。供養当日になって四方輿を迎えに出すが、「それでは法皇のお考えに反するではないか」と返している。したがって当日も「伴くだんの御導師も既に参り給へり。ありし蓑笠をこそ今日は著給はねども、衣袈裟は唯其の時のままなり」(堂供養)で、二人の従僧、十二人の下僧が庭に控えている様子は「誠に疋弱たる体なり。諸人皆目を驚かしてぞありける。」であったが、大前神社本は、

彼の僧、又何くより来たれるともなく十善の傍に着座し給ふ。初め院の御所へ参られけるには引き替へて法衣を着し、二人の従僧、十二人の下僧有つて随ひ奉る有様、昔、靈山説法の砌りも是れには過ぎじとぞ見へし

とあって、かなりの差異が認められる。長門本は、貧弱な僧たちをたよりなく見て、「あなあさましものものや、いかなる事にかさばかりの大願の御導師、是ほど成べしや、乞こつがい丐人とは申すも愚也。あなあさましくと口々に申しあはされけり。時にのぞんですでに御導師高座に登り給へば、膝ふるひわななきて、法則の次第も前後ふかくげに見給へり。浅ましきやう也。りん打鳴らし、何事をか申されけん、つぶくとどき給ふを、聞わけたる人もなし、浅ましく覚えて、人々頭を打ちうなだれて聞く所に」と、見るに耐えなく、聞くに忍びないなさけない有様をおもしろく記している。この長門本の記しかたは次の見事な説法との段差を考慮してのものである。見事な説法の描写は大前神社本が「堂供養」や長門本よりすぐれていると思われるが、そこに大前神社本の主張が垣間見られるようである。

山のようにお布施が与えられるが、貧僧の主義らしくこれを受け取らなく、功德のためにと非人に与えてしまう。「堂供養」では非人に与えたという記事は見られないが、持ち帰ったとも記されていない。長門本は「(導師が)御布施一つ取り給ひけり。二人の従僧も十二の下僧も、同じく一つ宛取つてけり」とあるが、大前神社本は「一紙半銭も持て帰らず」であった。

導師退場の飛翔について

堂 供 養 聴聞の衆、庭に充滿して、出でさせ給ふべきやうもなかりければ、御堂の正面より虚空に飛び上がり、総門の上に暫くましましけり

長 門 本 御導師既に帰り給ひけるに、聴聞の衆多くしてたやすく出させ給ふべき様もなし。其の時、御導師は初めは正面より出でて、土の上二尺計りも歩ませ給ひけるが、後には虚空をさして飛び上りて、惣門の上よりかき消す様にて、行方見え給はず

大前神社本 導師従僧共々帰られければ、是れ、帝只に非らずとて勅使を付けて見せらるるに虚空に翔えり、叡山に向かい根本中堂の内へ入り給へとぞ見へし

群衆の多さに歩くことができなくて飛び上がったと一方ではあり、一方では付けられるので比叡山へ飛び去ったとの違いが見られる。

貧僧が比叡山根本中堂の薬師如来の化身であり、二人の従僧が日光月光の二菩薩で、十二人の下僧が十二神将であったことについては、長門本のみが法皇の夢の中のお告げであったと記している。源平盛衰記は、「異説、二宮地主権現の非人と現じて、日光月光、十二神将を相具して、説法と云ふ事あり、僻事歟」と記している。さらに、長門本と源平盛衰記は得長寿院の別名が平愈堂であると記している。次のものは長門本の記事である。

此の御説法聴聞有りける大宮の女御、黄疔と申す瘡重かさくならせ給ひて、御限りなりけるが、最後の御聴聞御結縁と思し召して、希有にして御参詣ありけるが、則ち平愈ありけり、其の外聴衆一時の中に、上下男女二万六千七百余人が病い、立ち所にいえたり、それよりぞ此の寺を平愈寺とも申しけり

最後に薬師如来の見事な導師の様子、日光月光の二菩薩のこと、十二神将の手助けで歴史にも残るような供養ができたことを喜び、かつてもこのようなめでたい供養があったと東大寺供養をあげている。

その内容は、ほぼ大前神社本で紹介したとおりであるが、ここでも小異がみられる。

まず、「彼の歌の心にて、婆羅門僧正は普賢、行基は文殊、彼の二菩薩、大仏殿をば供養せられけるとは知られけり」(「堂供養」)と、釈迦在世の昔に、靈山で婆羅門尊者と行基が共に修行した弟子であり、二人は文殊と普賢の生まれ代わりであったとしている。その二首の歌であるが、行基の歌が「堂供養」では

靈山の釈迦の御前に契りてし真如くちせずあひみつる哉

となっており、婆羅門尊者の歌は

迦毘羅会の苔の筵に行きあひし文殊の御顔又ぞ拝する

となっている。前者の第二句と第三句が大前神社本では「御前に仕へてし」であり、後者の歌の第三句が大前神社本では「契りてし」、第五句が「今ぞ拝せる」であって、諸本の中でも同様の違いがみられるが、長門本は婆羅門尊者の歌は第五句が「今見つるかな」と、わずかな違いであるが、行基の歌が、

靈山のしやかなの御前にちきりてしふげんの光り爰にかゝやく

となっており、他の諸本が行基が文殊であることを示していたが、婆羅門尊者に対して明示していなかったところを、はっきりと示しているところが長門本の違いである。歌の心でその化身であることがわかると「堂供養」などは述べ

大前神社本『平家物語』の「殿上闇討」について

事項	堂供養	長門本	延慶本	源平盛衰記	両足院本	如白本	大前神社本
東大寺供養	○	○	○	×	○	○	○
平癒堂のこと	×	○	×	○	×	×	×
貧僧は根本中堂の薬師如来	○	○	○	×	○	○	○
貧僧の飛び去り	○	○	○	×	○	○	○
在原業平の和歌	×	○	○	×	×	×	×
布施	○ 返したとは 記さない	○ 一つ取って他は 非人に与える	○ 返したとは 記さない	○ 返したとは 記さない	○ 非人乞食に 与える	○ 非人乞食に 与える	○ 非人乞食に 与える
供養の説法に驚嘆	○	○	○	○	○	○	○
従僧二人、下僧十二人	○	○	○	×	○	○	○
迎への四方輿を返す	○	○	○	×	×	×	×
貧僧を東坂本地主権現まで尾行	○	○	○	×	×	×	×
貧僧登場導師に決定	○	○	○	×	○	○	○
法皇が導師に種姓下劣、貧僧でも可とする	○	○	○	×	○	○	○
くじ引き	○	○	○	×	○	○	○
名前の上がった僧	十三名	十三名	十三名	×	六名	六名	六名
導師希望の僧十三人	○	○	○	×	○十二名	○十二名	○十二名
導師・興福寺別当辞退	×	○	×	×	×	○	×
導師・天台座主(忠尋)辞退	○	○	○	×	○	○	○
供養(天承元年三月十三日)	×	○ 天承元年 三月十三日	×	○ 天承元年 三月十三日	×	×	×

ているが、歌の中に普賢と文殊を入れるほうがよりわかりやすいのではなからうか。後者の歌「迦毘羅會の」前に、「婆羅門尊者御返事に」（堂供養・長門本・延慶本）とか「婆羅門ノ返事」（両足院本）がはいっているが大前神社本には抜けている。さらに長門本は、このような供養の例として次のようにつづけている。

さらば普賢、文殊の二菩薩来りて、大仏殿の供養まし／＼き、しかのみならず天王寺をば難波津の海より僧来りて供養す、だるま和尚と申、興福寺をば曇天國の僧権化来りて供養す、今の得長寿院は根本中堂の薬師如来、日光、月光を従僧とし、十二神将をけんぞくとして御供養有、はるかに昔の聖跡にも、当がらんの有様は勝り給へりと万人仰ぎ奉る所也。忠盛朝臣か様に仏意に相叶ふ程の寺造宮す、仍て勸賞には欠國を給ふべき由仰下さる

このように外国の名僧高僧による寺の供養をあげ、得長寿院のめでたい供養を持ち上げて忠盛の心がけと昇殿に結びつけている。この結びつきは大前神社本や他の諸本にみられないスムーズさである。

法會の様子を描いたところでは大前神社本が際立っている。「去る程に、導師、／＼希代の舞樂供養也」のところであるが、「堂供養」はこのあたりのところを次のように述べている。

導師既に高座に登り給へば、膝ふるひわななき、法則次第も前後不覚に見えたり。暫くあつて、勸請の句をうちあげ給ひたりしかば、三十三間をひびかし、一千一体の正観音も納受し給ふらんとぞ目出たかりける。表白誠に玉を吐き給ひ、説法第一の富樓那の弁舌あり。聴聞集會の万人隨喜の涙を流して、無始の罪障をすすぎ、見聞覚知の非民は歡喜の袖かひつくろを刷ひて、即身の菩提を得る。昔須達長者四十九院の祇園精舎を建て、釈迦善逝の御供養ありけんも、利益結縁の砌是には過ぎじと目出度くぞ見えし。抑御説法長くして三時ばかりありけるを、法皇は刹那の程とぞ思し召しける。既に回向の鐘をならし、高座より下りて、正面の左の柱のもとに居給へり。始めは墨染の衣袈裟、今は錦の法服よりも貴くぞ見えける。御布施千石千貫金千両、其の上御加布施、御堂の前に山の如し

長門本は「堂供養」とほぼ同じく述べている。「堂供養」の内容は、貧僧による法会は、はじめはたよりなかったが、勸請の句を唱えはじめると大声でかつ見事で、釈迦の弟子の中で説法第一といわれる富楼那の弁舌を彷彿とさせるものであり、集った人々は皆感動し、六時間もの説法を法皇は一刹那の間と思われたほどであったというものであり、大前神社本の法会の内容は、富楼那を思わせ多聞第一の阿難陀の再誕を思わせるほど貧相の説法は見事であったと同じように述べるが、しかし、「上林紅葉の色ぞ」以下は花やかな舞台の様子であり、したがって「希代の舞楽供養也」であった。両足院本も大前神社本と同じように、この花やかな供養を載せているが、語られていく途中でつけ加えられたとみるべきであろうか。

四

表は得長寿院供養を比べたものであるが、大きく異っているのは源平盛衰記である。「堂供養」と長門本と延慶本が一つのグループとなるが、とりわけ「堂供養」と延慶本は類似している。これに対し、両足院本、如白本、大前神社本が一つのグループとなることがわかる。如白本には異説も付いているが、これは両足院本と大前神社本にはみられない。源平盛衰記の採られかたは「堂供養」を要約したかのように簡単ではあるが、長門本、延慶本と共に読み本系といわれるものが、これを載せており、語り本系と言われるものでは先ほどの富倉氏の言われるものに載っており、数多い語り本系の中では少数である。その中のひとつが大前神社本であった。その記事の類似から「如白本と大前神社本の二本は、さかのぼってたどって行くとあるいは一つの本に行き着く関係にあるのかも知れない」との見方もあり、さらに、これに両足院本も加えてみることもできるかも知れないが、語り本系といわれている諸本の中で得長寿

院供養を載せている本は、あるひとつのグループが予想され、ひとつの出所が予想されるのである。

平家の興亡を流布本などで見た場合、得長寿院供養のはなしは余計なものだと思われる。特に「殿上の仙籍を許されなかった」地下人の平家が天下を取るまでの描きかたにはリズムがあり、その中できっかけをつかんでいった忠盛の功績と理由はできるだけ、わかりやすく簡潔に述べていく必要があると思われる。そんな中に、大前神社本がこれを載せているのはどのような理由からであろうか、この本の作られたいきさつと共に今後の問題となりそうである。

注

- (1) 『平家物語全注釈』下巻(二)・富倉徳次郎著
- (2) 「説話形式についての一考察——平家物語長門本の得長寿院供養をめぐる」(渥美かをる)
- (3) 「得長寿院落慶供養について——平家物語の原本についての続論」(赤松俊秀)
「平家物語」構想論のために——「得長寿院供養事」をめぐる(山下宏明)
「得長寿院堂供養逸話の考察——「平家物語」傍流談研究の一環として」(水原一)
「長門本平家物語の平氏栄花話群について」(松尾葦江)
「唱導と王権——得長寿院供養説話をめぐりて」(阿部泰郎)など
- (4) 「堂供養」は注(1)より引用
延慶本は「延慶本平家物語」(勉誠出版・平成十一年再版)を使用
長門本は「平家物語 長門本」(名著刊行会 昭和四九年)を使用
源平盛衰記は大正三年・博文館発行を使用
大前神社本は平成六年・おうふう発行を使用
- (5) 「大前神社本平家物語の考察(二)」村上光徳・田村裕子(駒沢国文第八号)

(二〇〇三年一月二八日受理、二月三日採択)